

六一 同じ人六角牛に入りて白き鹿（しか）に逢（あ）えり。白鹿（はくろく）は神（かみ）なりという言（い）い伝（つ）た）えあれば、もし傷（きず）つけて殺（ころ）すこと能（あた）わずば、必ず祟（たたり）あるべしと思案（しあん）せしが、名譽（めいよ）の獵人（かりうど）なれば世間（せけん）の嘲（あざけ）りをいとい、思（せ）い切りてこれを撃（う）つに、手応（てご）た）えはあれども鹿（か）少しも動（うご）かず。この時（とき）もいたく胸騒（むなさわ）ぎして、平生（へいぜい）魔除（まよ）けとして危急（ききゆう）の丸（たま）を取り出し、これに蓬（よもぎ）を巻きつけて打ち放（はな）したれど、鹿（か）はなお動（うご）かず、あまり怪（あや）しければ近（ちか）よりて見るに、よく鹿（か）の形（かたち）に似（に）たる白（しろ）き石（いし）なりき。数十年（すうじゅうねん）の間（ま）山中（やまなか）に暮（くら）せる者が、石（いし）と鹿（か）とを見誤（みあや）まるべ

くもあらず、全く魔障（まししょう）の仕業（しわざ）なりけりと、この時ばかりは獵（や）めばやと思いたりきという。

六二　また同じ人、ある夜（よ）山中（さ
んちゆう）にて小屋（こや）を作るいとま
なくて、とある大木の下に寄り、魔除（ま
よ）けのサンズ繩（なわ）をおのれと木の
めぐりに三囲（みめぐり）引きめぐらし、
鉄砲を豎（たて）に抱（かか）えてまどろ
みたりしに、夜深く物音のするに心づけば、
大なる僧形（そうぎよう）の者赤き衣（こ
ろも）を羽（はね）のように羽ばたきして、
その木の梢に蔽（おお）いかかりたり。す
わやと銃を打ち放せばやがてまた羽ばたき
して中空（なかぞら）を飛びかえりたり。
この時の恐ろしさも世の常ならず。前後三
たびまでかかる不思議に遭（あ）い、その
たびごとに鉄砲を止（や）めんと心に誓い、

氏神（うじがみ）に願掛（がなが）けなど
すれど、やがて再び思い返して、年取るま
で獵人（かりうど）の業を棄（す）つるこ
と能（あた）わずとよく人に語りたり。

六三 小国（おぐに）の三浦某というは村
一の金持（かねもち）なり。今より二三代
前の主人、まだ家は貧しくして、妻は少し
く魯鈍（ろどん）なりき。この妻ある日門
（かど）の前（まえ）を流るる小さき川に
沿いて蒔（ふき）を採（と）りに入りしに、
よき物少なければ次第に谷奥深く登りたり。
さてふと見れば立派なる黒き門（もん）の
家あり。訝（いぶか）しけれど門の中に入
りて見るに、大なる庭にて紅白の花一面に
咲き鶏（にわとり）多く遊べり。その庭を
裏（うら）の方へ廻（まわ）れば、牛小屋
ありて牛多くおり、馬舎（うまや）ありて
馬多くおれども、一向に人はおらず。つい

に玄関より上（あが）りたるに、その次の間には朱と黒との膳椀（ぜんわん）をあまた取り出した。奥の座敷には火鉢（ひばち）ありて鉄瓶（てつびん）の湯のたぎれるを見たり。されどもついに人影はなければ、もしや山男の家ではないかと急に恐ろしくなり、駆（か）け出（だ）して家に帰りたり。この事を人に語れども実（まこと）と思う者もなかりしが、また或る日わが家のカドに出でて物を洗いてありしに、川上より赤き椀一つ流れてきたり。あまり美しければ拾い上げたれど、これを食器に用いたらば汚（きたな）しと人に叱（し）か（）られんかと思ひ、ケセネギツの中に置きてケセネを量（はか）る器（うつわ）となしたり。しかるにこの器にて量り始めてより、いつまで経（た）ちてもケセネ尽きず。家の者もこれを怪しみて女に問いたるとき、始めて川より拾い上げし由（よし）

をば語りぬ。この家はこれより幸運に向い、
ついに今の三浦家となれり。遠野にては山
中の不思議（ふしぎ）なる家をマヨイガと
いう。マヨイガに行き当りたる者は、必ず
その家の内の什器（じゅうき）家畜何にて
もあれ持ち出でて来べきものなり。その人
に授（さず）けんがためにかかる家をば見
するなり。女が無慾にて何ものをも盗み来
ざりしが故に、この椀自ら流れて来たりし
なるべしといえり。

○このカドは門にはあらず。川戸にて門前
を流るる川の岸に水を汲（く）み物を洗う
ため家ごとに設けたるところなり。

○ケセネは米稗（ひえ）その他の穀物（こ
くもつ）をいう。キツはその穀物を容
（い）るる箱なり。大小種々のキツあり。

六四 金沢村（かねさわむら）は白望（し
ろみ）の麓（ふもと）、上閉伊郡の内にて

もことに山奥にて、人の往来する者少なし。六七年前この村より栃内村の山崎なる某（なにがし）かが家に娘の婿を取りたり。この婿実家に行かんとして山路に迷い、またこのマヨイガに行き当りぬ。家のありさま、牛馬の多きこと、花の紅白に咲きたりしことなど、すべて前の話の通りなり。同じく玄関に入りしに、膳碗を取り出したる室あり。座敷に鉄瓶（てつびん）の湯たぎりて、今まさに茶を煮（に）んとするところのように見え、どこか便所などのあたりに人が立ちてあるようにも思われたり。茫然（ぼうぜん）として後にはだんだん恐ろしくなり、引き返してついに小国（おぐくに）の村里に出でたり。小国にてはこの話を聞きて実（まこと）とする者もなかりしが、山崎の方にてはそはマヨイガなるべし、行きて膳碗の類を持ち来（き）たり長者にならんとて、婿殿（むこどの）を先に立て

て人あまたこれを求めに山の奥に入り、ここに門ありきというところに来たれども、眼にかかるものもなく空（むな）しく帰り来たりぬ。その婿もついに金持になりたりということを聞かず。

○上閉伊郡金沢村。

六五 早池峯（はやちね）は御影石（みかげいし）の山なり。この山の小国に向（む）きたる側（かわ）に安倍ヶ城（あべがじょう）という岩あり。険（けわ）しき崖（がけ）の中ほどにありて、人などほとても行きうべきところにあらず。ここには今でも安倍貞任（あべのさだとう）の母住めりと言ひ伝う。雨（あめ）の降（ふ）るべき夕方など、岩屋（いわや）の扉（とびら）を鎖（とぎ）す音聞ゆという。小国、附馬牛（つくもうし）の人々は、安倍ヶ城の錠（じょう）の音がする、明日（あす）

は雨ならんなどいう。

六六 同じ山の附馬牛よりの登り口にもまた安倍屋敷（あべやしき）という巖窟あり。とにかく早池峯は安倍貞任にゆかりある山なり。小国より登る山口にも八幡太郎（はちまんだろう）の家来（けらい）の討死（うちじに）したるを埋めたりという塚三つばかりあり。

六七 安倍貞任に関する伝説はこのほかに多し。土淵村と昔は橋野（はしの）といし栗橋村との境にて、山口よりは二三里も登りたる山中に、広く平（たいら）なる原あり。そのあたりの地名に貞任というところあり。沼ありて貞任が馬を冷（ひや）せしところなりという。貞任が陣屋（じんや）を構（かま）えし址（あと）とも言い伝う。景色（けしき）よきところにて東海

岸よく見ゆ。

六八 土淵村には安倍氏という家ありて貞任が末なりという。昔は栄えたる家なり。今も屋敷（やしき）の周圍には堀ありて水を通ず。刀劍馬具あまたあり。当主は安倍与右衛門（よえもん）、今も村にては二三等の物持（ものも）ちにて、村会議員なり。安倍の子孫はこのほかにも多し。盛岡の安倍館（あべだて）の附近にもあり。厨川（くりやがわ）の柵（しやく）に近き家なり。土淵村の安倍家の四五町北、小鳥瀬川（こがらせがわ）の河隈（かわくま）に館（たて）の址あり。八幡沢（はちまんざ）の館（たて）という。八幡太郎が陣屋というものこれなり。これより遠野の町への路（みち）にはまた八幡山という山ありて、その山の八幡沢の館の方に向かえる峯にもまた一つの館址（たてあと）あり。貞任が

陣屋なりという。二つの館の間二十余町を隔つ。矢戦（やいくさ）をしたりという言い伝えありて、矢の根を多く掘り出せしことあり。この間に似田貝（にたかい）という部落あり。戦の当時このあたりは蘆（あし）しげりて土固（かた）まらず、ユキユキと動揺せり。或る時八幡太郎ここを通りしに、敵味方（てきみかた）いずれの兵糧（ひょうりょう）にや、粥（かゆ）を多く置きてあるを見て、これは煮（に）た粥かといひしより村の名となる。似田貝の村の外を流るる小川を鳴川（なるかわ）という。これを隔てて足洗川村（あしらがむら）あり。鳴川にて義家（よしいえ）が足を洗ひしより村の名となるという。

○ニタカイはアイヌ語のニタトすなわち湿地より出しなるべし。地形よく合えり。西の国々にてはニタともヌタともいう皆これなり。下閉伊郡小川村にも二田貝という字

あり。

六九 今の土淵村には大同（だいどう）という家二軒あり。山口の大同は当主を大洞万之丞（おおほらまんのじょう）という。この人の養母名はおひで、八十を超（こ）えて今も達者なり。佐々木氏の祖母の姉なり。魔法に長じたり。まじないにて蛇を殺し、木に止（とま）れる鳥を落しなどするを佐々木君はよく見せてもらいたり。昨年の旧暦正月十五日に、この老女の語りしには、昔あるところに貧しき百姓あり。妻はなくて美しき娘あり。また一匹の馬を養う。娘この馬を愛して夜（よる）になれば厩舎（うまや）に行きて寝（い）ね、ついに馬と夫婦になれり。或る夜父はこの事を知りて、その次の日に娘には知らせず、馬を連（つ）れ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬のおらぬより父に尋ねて

この事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首に縋（すが）りて泣きいたりしを、父はこれを悪（にく）みて斧をもつて後（うしろ）より馬の首を切り落せしに、たちまち娘はその首に乗りたるまま天に昇（のぼ）り去れり。オシラサマというはこの時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にてその神の像を作る。その像三つありき。本（もと）にて作りしは山口の大同にあり。これを姉神とす。中にて作りしは山崎の在家権十郎（ざいけごんじゅうろう）という人の家にある。佐々木氏の伯母が縁づきたる家なるが、今は家絶えて神の行方（ゆくえ）を知らず。末（すえ）にて作りし妹神の像は今（いま）附馬牛村にありといえり。

七〇 同じ人の話に、オクナイサマはオシラサマのある家には必ず伴ないて在（い

ま)す神なり。されどオシラサマはなくて
オクナイサマのみある家もあり。また家
よりて神の像も同じからず。山口の大同に
あるオクナイサマは木像なり。山口の辻石
(はねいし)たにえという人の家なるは掛
軸(かけじく)なり。田圃(たんぼ)のう
ちにいませるはまた木像なり。飯豊(いい
で)の大同にもオシラサマはなけれどオク
ナイサマのみはいませりという。

七一 この話をしたる老女は熱心なる念仏
者なれど、世の常の念仏者とは様(さま)
かわり、一種邪宗らしき信仰あり。信者に
道を伝えることはあれども、互いに嚴重な
る秘密を守り、その作法(さほう)につ
ては親にも子にもいささかたりとも知らし
めず。また寺とも僧とも少しも関係はな
く、在家(ざいけ)の者のみの集(あつ)
まりなり。その人の数も多からず。辻石

(はねいし)たにえという婦人などは同じ仲間なり。阿弥陀仏(あみだぶつ)の齋日(さいにち)には、夜中人の静まるを待ちて会合し、隠れたる室にて祈祷(きとう)す。魔法まじないを善(よ)くする故に、郷党に対して一種の権威あり。

七二 栃内(とちない)村の字琴畑(ことばた)は深山の沢にあり。家の数は五軒ばかり、小鳥瀬(こがらせ)川の支流の水(みなかみ)なり。これより栃内の民居(みい)まで二里を隔(へだ)つ。琴畑の入口に塚(つか)あり。塚の上には木の座像(ざざう)あり。およそ人の大きさにて、以前は堂の中(うち)にありしが、今は雨(あま)ざらしなり。これをカクラサマという。村の子供(こども)これを玩物(あそびもの)にし、引き出して川(かわ)へ投げ入れまた路上(みち)を引きずりなどする故に、今は鼻(はな)も口(くち)も見えぬようになれり。或(ある)あ

る）いは子供を叱（しか）り戒めてこれを
制止する者あれば、かえりて祟（たたり）
を受け病むことありといえり。

○神体仏像子供と遊ぶを好みこれを制止す
るを怒りたもうことほかにも例多し。遠江
小笠郡大池村東光寺の薬師仏（『掛川
志』）、駿河安倍郡豊田村曲金の軍陣坊社
の神（『新風土記』）、または信濃筑摩郡
射手の弥陀堂（みだどう）の木仏（『信濃
奇勝録』）などこれなり。

七三 カクラサマの木像は遠野郷のうちに
数多（あまた）あり。栃内の字西内（にし
ない）にもあり。山口分の大洞（おおほ
ら）というところにもありしことを記憶す
る者あり。カクラサマは人のこれを信仰す
る者なし。粗末なる彫刻にて、衣裳頭（い
しょうかしら）の飾（かざり）のありさま
も不明なり。

七四 栃内のカクラサマは右の大小二つなり。土淵一村にては三つか四つあり。いずれのカクラサマも木の半身像にてなたの荒削（あらけず）りの無恰好（ぶかつこう）なるものなり。されど人の顔なりということだけは分（わ）かるなり。カクラサマとは以前は神々の旅をして休息したもうべき場所の名なりしが、その地に常（つね）います神をかく唱（とな）うることとなれり。

七五 離森（はなれもり）の長者屋敷にはこの数年前まで燐寸（マツチ）の軸木（じくぎ）の工場（こうば）ありたり。その小屋の戸口に夜（よる）になれば女の伺い寄りて人を見てげたげたと笑う者ありて、淋しさに堪えざる故、ついに工場を大字山口に移したり。その後また同じ山中に枕木（まくらぎ）伐出（きりだ）しのため小屋をかけたる者ありしが、夕方になると人

夫の者いずれへか迷い行き、歸りてのち茫然（ぼうぜん）としてあることしばしばなり。かかる人夫四五人もありてその後も絶えず何方（いずかた）へか出でて行くことありき。この者どもが後に言うを聞けば、女がきて何処（どこ）へか連れだすなり。歸りてのちは二日も三日も物を覚えずといえり。

七六 長者屋敷は昔時長者の住みたりし址（あと）なりとて、そのあたりにも糠森（ぬかもり）という山あり。長者の家の糠を捨てたるがなれるなりという。この山中には五（いつ）つ葉（ば）のうつ木（ぎ）ありて、その下に黄金を埋めてありとて、今もそのうつぎの有処（ありか）を求めあらく者稀々（まれまれ）にあり。この長者は昔の金山師なりしならんか、このあたりには鉄を吹きたる滓（かす）あり。恩徳

(おんどく)の金山(きんざん)もこれより山続きにて遠からず。

○諸国のヌカ塚スクモ塚には多くはこれと同じき長者伝説を伴なえり。また黄金埋蔵の伝説も諸国に限りなく多くあり。

七七 山口の田尻(たじり)長三郎というは土淵村一番の物持(ものもち)なり。当主なる老人の話に、この人四十あまりのころ、おひで老人の息子(むすこ)亡(な)くなりて葬式の夜、人々念仏を終りおのこの帰り行きし跡(あと)に、自分のみは話好(はなしず)きなれば少しあとになりて立ち出でしに、軒の雨落(あまお)ちの石を枕にして仰臥(ぎようが)したる男あり。よく見れば見も知らぬ人にて死してあるようなり。月のある夜なればその光にて見るに、膝(ひざ)を立て口を開きてあり。この人大胆者にて足にて揺(うご)かして見

たれど少しも身じろぎせず。道を妨（さま）た（）げて外（ほか）にせん方（かた）もなければ、ついにこれを跨（また）ぎて家に帰りたり。次の朝行きて見ればもちろんその跡方（あとかた）もなく、また誰も外（ほか）にこれを見たりという人はなかりしかど、その枕にしてありし石の形と在（あ）りどころとは昨夜の見覚（みおぼ）えの通りなり。この人の曰く、手をかけて見たらばよかりしに、半（なか）ば恐ろしければただ足にて触（ふ）れたるのみなりし故、さらに何もののわざとも思いつかずと。

七八 同じ人の話に、家に奉公せし山口の長蔵なる者、今も七十余の老翁にて生存す。かつて夜遊びに出でて遅くかえり来たりしに、主人の家の門は大槌（おおづち）往還に向いて立てるが、この門の前にて浜の方

よりくる人に逢えり。雪合羽（ゆきがっぱ）を着たり。近づきて立ちとまる故、長蔵も怪しみてこれを見たるに、往還を隔てて向側なる畠地の方へすつと反（そ）れて行きたり。かしこには垣根（かきね）ありしはずなるにと思いて、よく見れば垣根は正（まさ）しくあり。急に怖ろしくなりて家の内に飛び込み、主人にこの事を語りしが、のちになりて聞けば、これと同じ時刻に新張村（にいばりむら）の何某という者、浜よりの帰り途（みち）に馬より落ちて死したりとのことなり。

七九 この長蔵の父をもまた長蔵という。代々田尻家の奉公人にて、その妻とともに仕えてありき。若きころ夜遊びに出で、まだ宵（よい）のうちに戻り来たり、門（かど）の口（くち）より入りしに、洞前（ほらまえ）に立てる人影あり。懐手（ふとこ

ろで)をして筒袖(つつそで)の袖口を垂れ、顔は茫(ぼう)としてよく見えぬ。妻は名をおつねといえり。おつねのところへ来たるヨバヒトではないかと思ひ、つかつかと近よりしに、奥の方へは遁(に)げずして、かえつて右手の玄関の方へ寄る故、人を馬鹿にするなど腹立たしくなりて、なお進みたるに、懐手のまま後(あと)ずさりして玄関の戸の三寸ばかり明きたるところより、すつと内に入(はい)りたり。されど長蔵はなお不思議とも思はず、その戸の隙(すき)に手を差し入れて中を探らんとせしに、中の障子(しょうじ)は正(まさ)しく閉(とぎ)してあり。ここに始めて恐ろしくなり、少し引き下らんとして上を見れば、今の男玄関の雲壁(くもかべ)にひたとつきて我を見下すごとく、その首は低く垂(た)れてわが頭に触るるばかりにて、その眼の球は尺余も、抜け出でてあ

るように思われたりという。この時はただ恐ろしかりしのみにて何事の前兆にてもあらざりき。

○ヨバヒトは呼ばい人なるべし。女に思いを運ぶ人をかくいう。

○雲壁はなげしの外側の壁なり。

八〇 右の話をよく呑（の）みこむためには、田尻氏の家のさまを図にする必要あり。遠野一郷の家の建てかたはいずれもこれと大同小異なり。

門はこの家の北向（きたむ）きなれど、通例は東向きなり。右の図にて厩舎（うまや）のあるあたりにあるなり。門のことを城前（じょうまえ）という。屋敷（やしき）のめぐりは畠にて、囲牆（いしょう）を設けず。主人の寝室とウチとの間に小さく暗き室あり。これを座頭部屋（ざとうべや）という。昔は家に宴会あれ

ば必ず座頭を喚（よ）びたり。これを待たせ置く部屋なり。

○この地方を旅行して最も心とまるは家の形の何（いず）れもかぎの手なることなり。この家などそのよき例なり。